

『掃除道具屋政談』

はやさき
林崎 ちひろ

3,664 文字

あらすじ:

掃除道具屋の八五郎。行商の途中、とある裏長屋を通りかかったところで、貧しい身なりだがどこか品のある女と幼い男の子に出会う。親子の身の上話を聞いて同情した八五郎は、売上金を置いたまま、そっと長屋を去るのだが…。

掃除で「汚れ」を落としてきれいになると、同時に心も清々しくなるものがございます。先日、物の本を読んでおられますとこんなことが書かれておりました。「よごれ」は表面的で物理的な汚れであり“洗浄”等で除去できるのに対し、「けがれ」は内面的で精神的な汚れであり“清め”等の儀式で除去できる、のだそうでございます。このとおりであるならば、掃除というのはある種の儀式であって、この儀式には物理的「汚れ」と精神的「汚れ」の両方を取り除く効果があると考えられるのでございます。

もうひとつ興味深いことが書かれておりました。「よごれ」や「けがれ」は放っておくと伝染するのだそうでございます。医療の分野では病気や感染症が伝染しないように感染予防が行われ、政治の分野では思想や風紀が望ましくない方向に伝染しないように統治が行われてまいりました。悪い伝染を起ささないためにも、常日頃から汚れを落としておくことは人々の重要な関心事だったのでございます。

そんな種々の“汚れ落とし”にまつわる小噺。一席お付き合いを。

同じ長屋に住む熊五郎くまごろうと八五郎はちごろうは、[熊八くまはち]という掃除道具屋を営んでいた。[熊八]では、“誰でも驚くほど簡単きれいになる掃除道具”を扱っている。何事もきっちりやらないと気が済まない元大工の熊五郎は商品の企画製作担当、何事も調子がよく要領が良い元読売の八五郎は営業宣伝担当、とそれぞれ役割が決まっていた。

この[熊八]に、与太郎よたろうというちよいと頭の弱い男が見習いに通っているのだが、何をやらせてもうまくいかない。物売りに行かせてみると、川に落ちて商品を全部流してしまい、ずぶ濡れになって帰ってくる。外仕事は良くないということで店番をさせてみると、

「これいくらだい？」

「ふたつで三十五文。」

「何？そりゃあ高すぎる。ちよいと勉強しな。」

「勉強は嫌いだ。特別に、ひとつで五十文にしてやる。」

「馬鹿野郎、ふざけやがって。こんな店、二度と来ねえぜ。」

と客を怒らせてしまう。

ところがこの与太郎、熊五郎のきっちりした指南のおかげで掃き掃除だけは良くできたので、近頃はほうきばん箒番として店のまわりをきれいにして

いる。

ところで、[熊八]には “これ一枚で光り輝きつやが出る”

「^{まかふしぎきん}摩訶不思議巾」というヒット商品の雑巾がある。八五郎は、久しぶりに隣町まで足を延ばして「摩訶不思議巾」を売りに出掛けることにした。

「磨き掃除に拭き掃除、この一枚で摩訶不思議、光り輝きつやが出る、きれいが長持ち十年保証～。」

天秤棒を担いで、調子よく唄いながら売り歩く八五郎。

「なかなか良い売れ行きだ。この調子で残りも全部売り切ってやらあ。」
“とある裏長屋”を通りかかろうとすると、どうも草鞋の具合が悪くなってきた。

「ちっ、履きつぶしちゃったか。新しいのに取っ替えるとするか。」

ちょうどそこへ、貧しい身なりだがどこか品のある女が長屋から出て来たので軽く会釈をすると、女も会釈を返す。

「ちょいとお願ひがあるんですが…。草鞋を履きつぶしてしまいましたね、新しいのに替えようと思うんですが、少しばかり場所をお借りできませんでしょうか？」

「こんな汚いところけど、良かったら使ってくださいな。」

玄関先に腰かけさせてもらい草鞋を履き替える。女は水の入った桶と手拭いを持ってきて、足を洗うよう勧めてくれた。

「ご親切にありがとうございます。これ、良かったら使ってやって下さい。」

売れ残っている「摩訶不思議巾」をひとつ、お礼に渡す。

「あら、いいんですか。」

「^{てめえ}手前でいうのもなんですがね、なかなか出来のいい雑巾なもんで。何かきれいに磨きたいものはないですか？」

女、少し考えて、

「あ、ちょっと待っててくださいね。」

奥から手鏡を持ってきて八五郎に渡す。

「こんなふうに磨くんですよ。磨き掃除に拭き掃除、この一枚で摩訶不思議、光り輝きつやが出る、きれいが長持ち十年保証～、ってなかんじでほら、この通り。」

「まあ、きれい。」

ぴかぴかになった手鏡を見てにっこりする女。そのとき、ぐう～っと八五郎の腹時計が鳴る。

「こりゃあ、お恥ずかしい。ついでと言っちゃあなんですが、弁当つかわせてもらっても構いませんか？」

「どうぞごゆっくり。」

一息ついて弁当を広げる八五郎。そこへ幼い男の子が駆け寄って弁

当をねだり始める。聞くと、昨日からご飯を食べてないと言う。

「おやめ、^{かめきち}亀吉、お行儀の悪い。すみませんねえ。」

女の名前は清^{きよ}といい、息子の亀吉と一緒にこの長屋で暮らしていると言う。元侍だった夫は病で先立ってしまったが、薬代の支払いが今でも残っており、毎日の暮らしも大変なのだという身の上話をしながら息子の失礼を詫びる。同情した八五郎。お清が用事で奥に入った隙に、男の子に弁当を与え、売上金を置いてそっと長屋を去る。

店に戻った八五郎。熊五郎に一部始終を話す。

「すまねえ。そういうわけで、売上を全部置いてきちゃった。」

「ふうん、なるほどな。売上の事は別に構わねえんだが、それよりもな、俺はその、お清さんと亀吉っていう親子がちょいと気にかかるんでえ。様子を見にその長屋へ行ってみようじゃねえか。」

こっそり様子を伺いに裏長屋へ向かう二人。すると長屋の連中が集まって何やら騒ぎになっている。

「いってえ何があった？」

「ここに住んでるお清さんと亀吉っていう親子が心中を図ったんだよ。」

「なんだって！？」

「聞くとところによると、物売りが玄関先に売上金を置いて行った。受け取れないと言って物売りを追いかけたお清さんは偶然大家に出くわし、溜まった家賃の支払いとしてその金を全部取り上げられてしまったんだとさ。それを苦にしての事らしいぜ。」

「ちくしょう、なんて野郎だ！！！」

頭にきた熊五郎と八五郎。大家の屋敷に飛び込んで大家を引きずり出してぶん殴る。長屋連中も加勢してすったもんだの大騒ぎ。

この騒ぎは、名奉行大岡越前^{おおおかえちぜん}の裁きとなる。無慈悲な行いをしたということで、大家は厳しい咎めを受けることになった。一方、売上金を置いて去った八五郎は、人助けをしたということでお上より褒美金を貰うこととなった。そして、喧嘩沙汰を起こした熊五郎、八五郎、裏長屋連中は三日間の謹慎となる。最後に、大岡奉行は八五郎にこう告げる。

「受けた褒美金で親子の面倒をみてやるのがよかろう。」

これにて一件落着。

長屋に戻った八五郎。物知りで面倒見の良い岩田^{いわた}の隠居^{いんきよ}に、どの

ようにしたらよいかと相談を持ち掛ける。

「ならばいっその事、その親子をこの長屋に住まわせて面倒をみるというのはどうだ？この大家には私から話をしておいてあげよう。それから、知り合いに腕のいい医者があるので診てもらおうといい。」

「ありがとうございます、ご隠居さん。よろしく申し上げます。」

親子はさっそく熊五郎と八五郎が住む長屋に身を移すことになった。亀吉はすぐに元気を取り戻し、長屋に住む子供たちと一緒に遊ぶようになった。お清の方も、八五郎をはじめとした周囲の介抱の甲斐あって、だんだんと健康を回復していった。お清を診てくれた医者は、八五郎に病人の世話について教えた。

「病人の体を、毎日、布とぬるま湯を使って拭いてあげなさい。それから布団や着物も、汗や血で汚れたりするので、できるだけ毎日取り替えてあげなさい。汚れたまま放っておくのは不潔だし、病が伝染することもあるからな。いつも清潔にしておくように。あとは、早く治ってほしいという真心があればそれでよい。」

八五郎は医者と言いつけを守り、あれこれと世話をした。そんな八五郎にいつしかお清は惹かれるようになり、床に臥せってはいても、手鏡を使って髪を整えてみたり、薄紅をさしてみたりするようになった。

夏が来た。お清もすっかり元気になって日常を取り戻していた。亀吉は熊五郎の手仕事を見るのが好きで、よく〔熊八〕に遊びに来るようになっていた。

「お前もやってみるか？」

「いいの？」

「ああ、いいとも。さあここに座りな。こうやって左の手に持って…。」

きらきら目を輝かせながら挑戦してみる亀吉。

「おっ、うまくできたなあ。」

熊五郎に褒められて嬉しそうな亀吉。

「亀吉、おっかさんも元気になったことだし、今晚みんなで花火見に行こう。」

今日は両国に花火があがる。熊五郎は八五郎を誘い、亀吉はお清を誘う。四人揃って出かけることになった。

「亀吉、飴買ってやろうか？」

「やったあ。」

熊五郎と亀吉、賑わう屋台の中へと消えていく。夜空にきれいな大輪の花が咲きはじめた。

「すっかり良くなって何よりだ。」

「八五郎さんに何とお礼を言ったらいいか…。」

「礼なんてとんでもねえ。」

照れる八五郎。両国橋から空を見上げる八五郎とお清。

「なあ、お清さん。その…、なんていうか…、お清さんと亀吉と俺と三人で、一緒に暮らさねえか？」

少し間をおいて、八五郎を真っ直ぐに見つめ、にっこり笑うお清。

「はい。」

たまや～、かぎや～。歓声上がる。そこへ千鳥足の与太郎が、何やら口ずさみながら二人の後ろを通り過ぎる。

「手鏡の、汚れきれいに落とした人が、お清きれいで恋に落ち。」

(了)